

Title	敬語形式「オイデ」の意味用法の変化
Author(s)	水谷, 美保
Citation	阪大日本語研究. 2007, 19, p. 49-66
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/4227">https://hdl.handle.net/11094/4227</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 敬語形式「オイデ」の意味用法の変化 Change of Semantic and Usage of *oide*

水谷 美保

MIZUTANI Miho

キーワード：移動 方向性 求心的／非求心的 敬語動詞 配慮

### 【要旨】

本稿では、江戸語・東京語における敬語形式「オイデ」の意味用法の変化を明らかにすることを試みた。「オイデ」は江戸期には語源の意味から拡張し、求心的／非求心的な移動と存在、継続を表していた。明治期以降になると、そこから非求心的な移動の意味が見られなくなっていく変化が現れる。この変化の主な要因は、「オイデ」が求心的な移動として繰り返し使われ、その意味が語に焼きつくこととなり、その結果移動として対立する非求心的な移動には使われなくなったことだと考える。

### 0. はじめに

〈出る〉を語源とする敬語形式「オイデ」は、江戸語・東京語から「オイデだ」「オイデを願う」「オイデのお客」のようにして、移動・存在などを表す敬語形式として用いられてきた<sup>1)</sup>。この形式は現代の標準語でも「こちらへオイデ下さい」「今度の学会へはオイデですか」「早くオイデ」のように使用されている。本稿では「オイデ」に生じた意味用法の変化を明らかにする。

「オイデ」については、江戸語の先行研究や辞書などで「〈行く〉<sup>2)</sup> 〈来る〉 〈いる〉 〈ている〉を表す軽い敬語」、「命令、要求を表す」(湯澤1954)のように記述されている。「オイデ」のほか、多くの尊敬語動詞<sup>3)</sup>は語源の意味から拡張して、移動・存在、継続を場面によって一語で表し分けるようになる。従来の敬語研究で「オイデ」や敬語動詞は、最も広がった際の意味領域や用法を示されることが多かった。しかし、これら形式の意味用法は広いまま維持されるのではなく、縮小する様相が見られる。筆者はこれまで「イラッシャル」が非求心的<sup>4)</sup>な〈行く〉の意味を表さなくなりつつあることを示した(水谷2005)。本稿では、「イラッシャル」と同様に「オイデ」においても、かつては表した非求心的な意味が見られなくなる変化が生じていることを指摘する。その上で、「オイ

「デ」や複数の敬語動詞の意味用法に共通する変化の方向性のあることを述べる。そして、このような変化は、求心的な方向への移動が繰り返し使われることによってその意味が焼きついたために、一方の移動である非求心的な方向には用いられなくなったと考える。求心的な移動として「オイデ」や敬語動詞が繰り返し用いられるようになった要因には、他者が話し手自身へ向かう移動には、恩恵や配慮の意識から尊敬語形式を用いて表現しやすいことが背景にあると考察した。

## 1. 先行研究

本稿で取り上げる「オイデ」と関係する形式「オイデナサル」「オイデデアル」などは江戸前期上方語から使われていたが(山崎1963)「オイデ」が文献に現れるようになったのは江戸語からのようである。湯澤(1954)では「オイデ」の形式、活用について以下のように述べている。

江戸言葉では普通「いでる」を動詞として用いることはないが、「おいで」に「だ」「で」等を付けて用いる。

「連用形 お...で」「終止形 お...だ」「連体形 お...の」「仮定形 お...なら」「推量形 お...だろ」

そして「オ...ダ」という形式については、次のように言及している。

江戸では「お聞きだ」「お習いだ」のように、接頭語「お」の附いた動詞の連用形に、指定の助動詞「だ」を付けて、「お聞きなさる」「お習いになる」のような意味に用いる。すなわち「お...だ」は敬語の助動詞と見られる。もっとも厳格に言えば、敬語というよりも、親愛の意を表わす語と説くべきである。

意味用法については、次の小松(1971)が「オイデナサル」について言及するなかで、「オイデ」にも触れている。

「行く」「来る」「いる」「ている」などの尊敬語。(例略)「おいでなさる」は「おいでだ」となると、そのままの意味で、やや軽い敬語になる。

田中(1957)は江戸語と東京語の資料に見られる命令表現の一つに、「オイデ」を挙げており、その意味は〈来い〉〈居ろ〉〈行け〉を表すと述べている。

管見の限り、「オイデナサル」「オイデニナル」について言及されている論文は見られるが、「オイデ」についてはほとんど見られない。言及されていても、上記に引用したような範囲にとどまることが多く、「オイデ」の意味用法を変化という観点から取り上げている研究は見当たらなかった。

## 2. 調査概要

本稿では、江戸語・東京語における敬語形式「オイデ」の意味用法の変化を見ていく。関係する形式の影響も考慮に入れるため、40の文学作品から以下の基準によって用例を収集した。対象とする時代は、「オイデ」が文学作品上に見られるようになる江戸天明期(1787)前から昭和30年代までに公刊された文学作品とした。

- (1) 〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉を表す「オイデ」
- (2) 〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉を表す尊敬語動詞
- (3) 〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉を表す尊敬語の分析的形式(いわゆる「敬語の助動詞」)
- (4) (1)(2)(3)の形式が「デ」に後接し、コピュラとなる場合(例「元気デオイデダ」)

本稿では会話文に現れた「オイデ」を主な分析対象とするが、収集したデータには、多くはないものの内的独白、一人称小説の地の文、手紙文など会話文以外の用例も含んでいる。なお、江戸語・東京語で一般的ではないと考えられる形式(「オイキル」など)、「ナンス」「ナハル」のような遊里専用形式については分析の対象外とする。

本データは江戸期を中心に出身地不明の作家がいるため出身地の限定はしていないが、会話文等から江戸語・東京語を話していると判断した人物から用例を収集した(『多情多恨』以降の作家は東京出身の作家に限っている)。そして江戸期の作品は、生年が不明な作家が多いことから、全体を通じて作品の発表年を基準に分析する。

分析対象として「オイデ」を取り上げた理由は、この形式は江戸語から現代語まで使用されている形式である。このような長い期間の使用を経る間に生じるであろう意味用法の変化を取り上げたいと考えたためである。

使用テキストの詳細は稿末の[資料]参照。なお例を掲載する場合、旧字体は新字体に

よって示すこととする。

### 3. 結果

§ 2 で示した基準により、合計1938例の用例を収集した。その内訳を表1に示す。

表1 〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉を表す尊敬語形式

		江戸	明治以降	合計
敬語動詞	オイデナサル	158	68	226
	オイデ	209	170	379
	オイデナンス・オイデナサル	74	2	76
	オイデニナル	0	47	47
	その他オイデ類	19	5	24
	イラッシャル	108	769	877
	ミエル	9	6	15
	その他	34	0	34
分析的形式	ナサル	60	18	78
	レル・ラレル	2	94	96
	シャル・サッシャル	40	1	41
	ナサンス・ナンス・ナハル・ナマス	44	1	45
	合計	757	1181	1938

表1から、主要な形式が表す意味の用例数を表2に示す。意味を確定できなかった例（〈行く〉とも〈来る〉とも考えられる例など）挨拶表現などは表2に含めていない。

表2 〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉コピュラを表す主要な尊敬語形式

		行く	来る	居る	ている	コピュラ
敬語動詞	オイデナサル	34	93	31	39	7
	オイデナンス・オイデナハル	16	31	4	11	1
	オイデ	61	136	41	122	5
	オイデニナル	15	29	2	1	0
	イラッシャル	123	241	45	338	58
分析的形式	ナサル	17	23	13	21	0
	レル・ラレル	15	13	1	43	0
	シャル・サッシャル	1	13	7	11	0
	ナンス・ナハル・ナサンス・ナマス	3	13	7	13	1

表1、表2を見ると、江戸期から明治大正昭和にかけて江戸語・東京語では移動、存在、継続を表す際、分析的形式よりも敬語動詞が多く使われることが分かる。これは、江戸語・東京語の特徴だと言えよう。敬語動詞（非分析的形式）としては主に「オイデナサル」「オイデナンス」「オイデナハル」「オイデ」「オイデニナル」「イラッシャル」が見られる。つまり、「オイデ」＋接続形式もしくは「イラッシャル」が使われているということになる。この中で「イラッシャル」の意味用法の変化の概略は、既に山西（1972）水谷（2005）で明らかになっている。そこで本稿では「イラッシャル」に次ぐ用例数がある「オイデ」について、主に江戸語から現代語にかけての意味用法の変化に注目していきたい。

#### 4. 意味用法の変化

本節では§3の結果を踏まえ、敬語形式「オイデ」の移動・存在、継続を表す意味用法とその変化に注目する。本稿で対象とする「オイデ」は、収集した用例から「オイデを願う」「オイデがない」のような名詞用法<sup>(5)(6)</sup>、「オイデだ」「オイデ下さい」のような述語用法<sup>(7)(8)</sup>、「(こっちへ)オイデ」のような命令用法<sup>(9)(10)</sup>に分けられる。

- (5) チト姉さん、私の宅へも御入来を願います。甚だ手狭では御座いますが。  
(春色江戸紫・男性→義姉)
- (6) とんと食堂にお出でがなかったので、お察し申しましたの、船にはお困りですか  
(或る女・女性→敵視している女性)
- (7) コレ、旦那は何処へお出でだ。  
(恋の若竹・下女→隣家の下男 話題の主語は隣家の主人)
- (8) どうか孝助殿を御供に連れて御出下さい。  
(怪談牡丹灯籠・男性(武士)→上役である武士)
- (9) 駕籠やさん御苦労、まアお茶でも飲んでお出で。  
(閑情末摘花・女性→籠屋)
- (10) 葡萄酒はいいからね……カステラをもっと切っておいで。  
(社会百面相・主人→下女)

これらの各用法は、「オイデ」が現れる早い時期の作品『浮世風呂』『春色梅児誉美』から既に見られる。「オイデ」に上記のような種々の用法が見られるのは、江戸語ではこの

語に限らず「オ(ゴ)～(ダ)」という形式が、動詞の連用形に接続して「お言いだ」「お言いでない」「お言いだらう」「お言いの」「お言い」のようにふるまい、「軽い敬語」となることに関わると考えられる(湯澤1954)。

次は「オイデ」の意味領域の変化を見て行きたい。表2で示した1699例を意味ごとに分類して、作品の発行年順に示したのが図1図2である。なお、図1図2の「●」<sup>5)</sup>は前述した各用法を一括して示している。図1から、「オイデ」は1800年代頃の江戸語から明治初期にかけては、「オイデナサル」と同様に移動と存在そして継続の〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉を表す敬語形式として使われていることが分かる。しかし、この意味領域は保たれ続けるわけではなく、変化が見られる。求心的な移動と〈来る〉継続の〈ている〉としては使われ続けるものの、非求心的な〈行く〉の意味は大正期あたりからその例が現れなくなる。存在の〈いる〉の見られる作品も明治期半ばあたりから連続しなくなる。

次に、図3では「オイデ」の意味を命令用法「●」と非命令用法「■」に分けて示した。明治期に入ると非求心的な意味は、命令用法〈行け〉しか見られなくなる。大正期に入ると命令用法としても現れなくなる。求心的な移動の意味は、命令用法〈来い〉としてしか使用されない作品が出てくるが、それ以外の用法も保たれる。

- (11) そんなら徳さん又お出でよ。

(娘消息・30ばかりの女→25,6の男)

「オイデ」は語源が〈出る〉であり、移動を表すことに由来するためか明治期の作品までは〈行け〉の例も見られる。

- (12) おとつさんはお跡から行くからお先へお出でよ。

(浮世風呂・父親→息子)

- (13) オヤ竹さんが来なすったのかえ。それならば早くお出で。

(恋の若竹・芸者→芸者)

- (14) もう用はないのよ。早くあっちにお出で。

(或る女・主人→下女)

〈出る〉という語源からは〈行け〉の意味を表し得ると考えられるが、非求心的な移動〈行け〉は〈来い〉に比べて早くに現れなくなる。筆者の内省でも「オイデ」によって求心的な移動〈来い〉は表せるが、非求心的な〈行け〉として用いることはできない。これ

		オイデナサル				オイデ				オイデニナル			
作品名	出版年	行く	来る	居る	ている	行く	来る	居る	ている	行く	来る	居る	ている
江戸時代	遊子	1770											
	辰巳	1770											
	駅舎	1779											
	卯地	1783											
	通言	1787	●	●		●		●					
	四十	1790		●									
	錦之	1791		●									
	二筋	1798											
	風呂	1809	●	●		●	●	●	●				
	叶福	1819											
	峯初	1819	●	●	●	●							
	梅児	1832	●	●	●	●	●	●	●	●			
	吾妻	1833	●	●		●	●	●		●			
	若竹	1833	●	●	●	●	●		●	●			
	娘消	1836	●	●	●	●	●	●	●	●			
	未摘	1839	●	●	●	●	●	●	●	●			
	七偏	1857		●		●		●	●	●			
	戸紫	1864	●	●	●	●		●	●	●			
	明治時代	春雨	1876	●	●		●	●	●	●	●	●	
怪談		1884	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●
書生		1885		●	●	●	●	●	●	●	●		
神明		1890	●		●	●	●	●	●	●	●		
多情		1896	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
百面		1901				●	●	●	●	●	●	●	
其面		1906		●	●		●	●	●	●	●		
三四		1908				●		●	●	●	●		
或る		1911		●	●		●	●	●	●	●		
大正時代	神経	1917				●	●		●				
	暗夜	1919					●	●	●		●		
	友情	1919					●						
	菩提	1923	●				●	●			●		
	痴人	1924					●		●		●		
	竹沢	1924							●				
昭和時代	伸子	1924		●			●	●	●	●	●		
	旧聞	1929		●		●			●	●	●		
	つゆ	1931					●		●	●	●		
	菜穂	1940						●	●	●			
	流れ	1956							●	●	●		
	事件	1961											
人形	1964					●			●				

図1 「オイデナサル」「オイデ」「オイデニナル」の意味

作品名は紙幅の都合上省略して示している。詳細は図3もしくは[資料]参照。



		イラッシャル				ナサル				レル・シャル			
作品名 出版年		行く	来る	居る	ている	行く	来る	居る	ている	行く	来る	居る	ている
江戸時代	遊子 1770												
	辰巳 1770					●	●	●	●				
	駅舎 1779	●											
	卯地 1783						●						
	通言 1787									▲	▲	▲	
	四十 1790												
	錦之 1791											▲	
	二筋 1798										▲		
	風呂 1809	●	●			●	●	●	●				
	叶福 1819		●										
	峯初 1819		●				●	●	●	●			●
	梅児 1832	●		●			●				▲	▲	▲
	吾妻 1833										▲	▲	
	若竹 1833	●	●	●	●		●	●	●		▲		
	娘消 1836	●	●			●	●	●	●		▲		▲
	未摘 1839	●	●		●	●	●	●	●		▲		▲
	七偏 1857	●	●								▲		▲
	戸紫 1864	●	●						●				
	明治時代	春雨 1876	●	●				●					▲
怪談 1884		●	●	●	●	●				●		●	●
書生 1885		●	●		●			●					
神明 1890		●	●			●	●		●				
多情 1896		●	●	●	●					●			●
百面 1901		●	●	●	●								●
其面 1906		●	●		●	●			●	●	●		
三四 1908		●	●	●	●								
或る 1911		●	●	●	●								
大正時代	神経 1917	●	●		●						●		●
	暗夜 1919	●	●	●	●								
	友情 1919	●	●	●	●								
	菩提 1923	●	●	●	●						●		●
	痴人 1924	●	●	●	●						●		●
	竹沢 1924	●	●	●	●					●	●		●
	伸子 1924	●	●	●	●					●			●
昭和時代	旧聞 1929		●		●								
	つゆ 1931	●			●								
	菜穂 1940	●	●		●					●	●		●
	流れ 1956		●		●								
	事件 1961		●		●								
	人形 1964	●	●	●	●				●				●

図2 「イラッシャル」「ナサル」「レル(ラレル)」「シャル(サッシャル)」の意味  
紙幅の都合上、「シャル(サッシャル)」は「レル(ラレル)」とともに▲で示した。  
作品名も紙幅の都合上省略して示している。詳細は図3もしくは[資料]参照。

作 品 名 出版年			行く	来る	居る	ている
江戸時代	遊子方言	1770				
	辰巳之園	1770				
	駅舎三友	1779				
	卯地臭意	1783				
	通言総籙	1787		●		
	傾城買四十八手	1790				
	錦之裏	1791				
	傾城買二筋道	1798				
	浮世風呂	1809	●■	●■	●	●■
	叶福助略縁起	1819				
	清談峯初花	1819				
	春色梅児誉美	1832	●■	●■	●	●■
	風俗吾妻男	1833	■	●		●■
	恋の若竹	1833	■		●	●
	娘消息	1836	●■	●■	●	●
	閑情未摘花	1839	●■	●■	●	●■
	七偏人	1857		●■	●	●
	春色江戸紫	1864		●■	●	●
	明治時代	春雨文庫	1876	●	●■	●
怪談牡丹灯籠		1884	■	●■	●■	●■
当世書生氣質		1885	■	●■	●	●■
神明恵和合取組		1890	●■	●	●	●■
多情多恨		1896	■	●■		●■
社会百面相		1901	■	●■		■
其面影		1906	■	■		●■
三四郎		1908			●	●
或る女		1911	■	●■		●■
大正時代	神経病時代・若き日	1917	■	●■		
	暗夜行路	1919		●	●	●■
	友情	1919		■		
	菩提樹の陰	1923		■	●	
	痴人の愛	1924		■		■
	竹沢先生という人	1924				●
昭和時代	伸子	1924		■	●	●
	旧聞日本橋	1929		●■		■
	つゆのあとさき	1931		●■		●
	菜穂子・楡の家	1940			●	●
	流れる	1956				
	事件	1961				
人形姉妹	1964	●			●	

図3 「オイデ」の意味用法

● 命令用法以外／■命令用法

らの結果から、命令用法としての「オイデ」は〈行け〉〈来い〉どちらの方向にも残るのではなく、求心的な方向〈来い〉にのみ残存していくと言える。

なお、補足データとして、本稿で分析対象とした以降（昭和30年代～平成）に刊行された小説（東京出身の作家）58作品からも移動、存在表現を表す尊敬語形式の用例を収集した<sup>6)</sup>。図等が煩雑になるため本稿では割愛したが、結果の概略のみを以下に示す。

(イ) 移動・存在を表す「オイデ」は47例見られた(26作品)。

(ロ) 意味と命令用法の内訳は以下の通り。

〈来る〉14例(11作品) 〈来い〉15例(9作品)

〈いる〉18例(10作品)

〈行く〉〈行け〉〈いる〉は0例

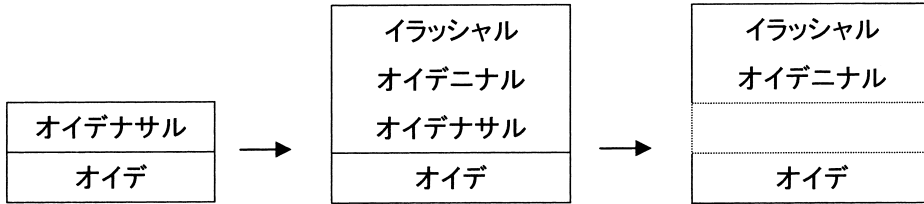
補足データの結果から、本稿で対象とした昭和30年代以降、「オイデ」は求心的な移動（命令用法含む）と存在としては用いられるが、非求心的な移動と存在の命令用法の例は見られないことが分かる。

図1から、〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉を表した「オイデナサル」においても、他の意味に比べて〈行く〉が先に現れなくなる同様の変化の端緒が見える。しかし、「オイデナサル」は「オイデ」ほどはっきりした変化を示さない。これは、「オイデナサル」が変化を見せる前に、新形式である「イラッシャル」「オイデニナル」に取って替わられたためだと考える。江戸語では上方語から引き継いだ「オイデナサル」と「軽い敬語」としての「オイデ」が用いられており、特に丁寧語「マス」を伴った「オイデナサリ(イ)マス」は、最も敬意が高かったであろう形式である。

(15) モシあんさんがお出でなさりましたよ。

(通言総籙・茶屋の下女→茶屋の女房 話題の主語は客)

そこに、新形式として「イラッシャル」や明治期には「オイデニナル」が最も敬意が高い位置を占めるようになった。



人称代名詞に見られるように、敬語はその敬意を下げて形式が生き残る場合がある（佐久間1943）。しかし、江戸期・明治期にはすでに「軽い敬語」として「オイデ」が頻繁に用いられていたため、「オイデナサル」は敬意を下げるなどして生き残ることができず、意味用法の縮小が進む前に消滅したと考えられる。接続形式の尊敬語「ナサル」が用いられなくなったことも影響しているだろう。

「オイデ」の丁寧さも見ておきたい。江戸期では「オイデを願う」のような名詞用法の場合、「茶屋の主人→客」「男性→義姉」のような関係で用いられ、男性の使用が多い。「どこへオイデだ」のような述語用法では「友人→友人」「妻→夫」のような場面で「軽い敬語」として使われる。「こっちへオイデ」のような命令用法は「主人→使用人」のような目上から目下への命令の例も見られる。しかし、それよりも「友人→友人」「恋人→恋人」「親→子」「妻→夫」のような間柄で、親しみを持った〈勧め〉の例が多い。明治期以降でも江戸期と同じ丁寧さをもって使われるが、「です」や「下さる」「頂く」が接続し「オイデです」「オイデ下さる」「オイデ頂く」となると、「男性→上司」「妻→夫の知人（初対面の人物）」のような場面でも使われ、述語用法においても高い丁寧さを表すことがある。このように「オイデ」には種々の用法や接続があり、丁寧さはそれぞれの用法によって異なりが見られる。

## 5. 方向性の限定

前節までで述べてきた敬語動詞「オイデ」の意味用法の変化をまとめると以下のようになる。

- (A) 江戸期では名詞用法、述語用法、命令用法が見られ、その意味も〈行く〉〈来る〉〈いる〉〈ている〉として用いられている。
- (B) 非求心的な移動は明治期から命令用法〈行け〉としてしか現れなくなる。
- (C) 大正期には〈行け〉の意味も見られなくなり、非求心的な意味は表さなくなる。
- (D) 求心的な移動も大正期から命令用法〈来い〉のみ現れる作品が出てくる。

- (E) 補足データの結果も合わせると、「オイデ」に残る意味用法は〈来る〉〈来い〉〈いる〉〈ている〉である。

本節では、敬語動詞「オイデ」の意味領域からかつて表していた非求心的な意味〈行く〉〈行け〉が失われるということに注目したい。§4でも述べたが、「オイデ」の語源が移動を表す〈出る〉であることから考えると、〈行く〉〈行け〉を表してもおかしくない。これに対し求心的な移動である〈来る〉〈来い〉は、§4で補足データとして示したように、平成に刊行された小説にも依然その用例が見られる。このように、同じ移動でも求心的な方向は残存し、かつて表した非求心的な方向の意味が次第に表されなくなる変化は「イラッシャル」と共通するものである(水谷2005)。一方、変化の途中段階で特に非求心的な意味が命令用法へ片寄り傾向は「イラッシャル」には見られず、異なる点もある(水谷2004)。

「オイデ」が動作主の非求心的な移動〈行く〉〈行け〉を表さなくなるのは、動作主の移動を表す際、求心的な方向への移動〈来る〉〈来い〉が語の意味として焼きついたことが理由の一つであろう。「イラッシャル」にも生じている同様の変化について、水谷(2005)では久野(1978)の視点の概念による〈行く〉〈来る〉の定義から、その要因を「話し手が自身の関わる動作主の移動を、優先して表すため」、「〈いる〉は動作主の移動をめぐる関係にはない」ことが主な要因となって、意味領域に保たれていると考察した。これはここまで指摘してきた「オイデ」の変化にも当てはめることができる。

「オイデ」は敬語形式として用いられるようになった当初は、移動を表す語源の意味が保たれていたことなどから非求心的な移動〈行く〉〈行け〉を表した。その後、求心的な移動〈来る〉〈来い〉として繰り返し使われることによって、この意味が焼きつくこととなり<sup>7)</sup>、その結果「オイデ」が動作主の移動表現に用いられる場合には、求心的な方向の移動として捉えられるようになったと考える。存在〈いる〉の現れる作品が明治期半ばから少なくなるのも、求心的な移動の意味が影響しているだろう。ただし、上記でも触れたが〈いる〉は非求心的な〈行く〉のように求心的な移動と対立しないことから、「オイデ」の意味領域に残存しているのではないだろうか。そして、〈ている〉としても使われ続けるが、これは継続を表す形式として機能語化しているためだと思われるのである。

求心的な移動とは、多くは動作主が話し手へ向かう移動である<sup>8)</sup>。こうした移動に繰り返し「オイデ」や敬語動詞が使用される理由を考えてみたい。求心的な移動は話し手に知覚されることから言語化されやすいことなどもあろうが<sup>9)</sup>、話し手自身へ向かう移動であることから、配慮の意識が働くのではないだろうか。つまり、〈来る〉は主に話し手

自身が位置する場所への動作主の移動であるために、尊敬語形式である「オイデ」や敬語動詞を用いて待遇するという意識が働くと考えられるのである。

こうした敬語運用がされる背景には、敬語意識の変化があると思われる。宮地（1981）は古代から現代までの敬語意識の歴史について以下のように述べている。

古代敬語は階層的規範性にもとづいて、敬讓の意識でつかわれる傾向が強いものであった。これに対して現代敬語は社会的場面性にもとづいて、礼儀の意識でつかわれる傾向が強いものである<sup>10)</sup>。

近世敬語は二重性格を持つものだったと総括されよう。すなわち、支配武士階層と被支配人、その他の階層とのあいだの上位・下位関係にもとづく古代敬語の性格と、都市生活町人を代表とする庶民のあいだに構成されていった現代敬語的市民社会敬語の性格という二重性格である。

また、外山（1977）は室町期以降の敬語（以下では「近代敬語」）の特徴を、以下のよう

に述べている。

近代敬語の特徴は、場面や相手（敬語使用の対象や聞き手）との関係などへの話し手の配慮が、敬語表現の選択の仕方に大きく影響することだと言える。恩恵・利害・親疎・あるいは社交上の必要など、いわば話し手側の意識が優先する。古代敬語が、身分・地位という客観的条件による外側からの規制が強いのに対し、近代敬語は、話し手の主観的心理的要因による、いわゆる相対敬語的性格の強いものだと言えるだろう。

つまり、日本語の敬語は身分などから使用する敬語が決まる絶対的な古代敬語から、室町期以降は話し手の礼儀や配慮の意識に基づいた相対的な敬語という性質に移行するということである。本稿で対象とした敬語形式「オイデ」は江戸期から現代にかけて使われており、変化の現れる明治期以降は「場面や相手（敬語使用の対象や聞き手）との関係などへの話し手の配慮」によって敬語が使用される時代である。そのために、他者が話し手自身へ向かう移動には、恩恵や配慮の意識から尊敬語形式である「オイデ」を用いて表現しやすいと考える。

〈来る〉と恩恵や配慮の意識が関連することは、「オイデ」と「～て下さる」「～て頂く」との共起からもうかがえるのである<sup>11)</sup>。本稿で収集したデータを見ると、明治期の

作品から「オイデ」には「～て下さる」と結びついた例が見られるようになる。

- (16) 度々おいで下さつたさうですが、生憎いつも居りませんので...

(社会百面相・男性→義兄の妻)

- (17) どうか是非お出で下さい

(暗夜行路・男性→敬愛する作家)

上記のような例について、本稿調査対象の範囲から収集できたのは6例であるが<sup>12)</sup>、その場合「オイデ」の意味はすべて〈来る〉であることに注目したい。なお、命令用法の場合と同じく補足データを利用すると、「オイデ」に「～て下さる」「～て頂く」が接続する例は12例あり、これらもすべて〈来る〉の意味であった。ここから動作主の〈来る〉という移動に対して、話し手が恩恵や配慮の意識を持つために「～て下さる」「～て頂く」と共起すると考えられるのである<sup>13)</sup>。

そして命令用法の「オイデ」でも、それ以外の用法と同じように、求心的な移動〈来い〉として繰り返し使われた結果、同様に移動を表す〈行け〉には用いられなくなったのだと考える。命令用法において求心的な移動が繰り返し使われる理由ははっきりとはわからない。考えられることとして、§4でも述べたが、命令用法「オイデ」は家族や親しい関係において〈勤め〉として用いられることが多い。そのような関係で移動を勤める場合、話し手から離れる非求心的な移動よりも話し手のところへ移動する求心的な移動を勤める場面の方が多いのではないか、ということが挙げられる。

加えて、敬語意識に変化が現れる中世以降に用いられる敬語動詞「オジャル」「オリヤル」についても触れておく。これらの意味用法について言及している先行研究を見ると、その意味として非求心的な〈行く〉が記されていない。山崎(1963)によれば、江戸前期上方語の「オジャル」は「室町期では主体待遇に「来ル」「行ク」「イル」の三意があるのに、元禄期ではそのうち「来ル」の意だけに用法が限定されている」という指摘が見られる。「オリヤル」について、キリシタン資料を見ると『日葡辞書』(1603)では「〈有る〉、〈来る〉、[...の状態、位置に]〈ある〉」、『日本大文典』(1604-08)では「〈来る〉、〈居る〉の意味を持つてゐる」のように記されている。『日本国語大辞典』などの辞書を見ると、「オジャル」「オリヤル」は「〈行く〉〈来る〉〈いる〉の尊敬語」のように意味記述されている。このような辞書の意味記述と上記の先行研究やキリシタン資料の記述とを比較すると、「オジャル」「オリヤル」にも非求心的な移動の意味を表さない方向への変化が見られると言えるのである。

上記から本稿で示した「オイデ」や敬語動詞には共通する変化の方向性があると言える。管見の限り、先行研究においては個々の敬語動詞の意味記述や変化の指摘はされているが、複数の形式に共通の変化が生じているという指摘はなく、この点において本稿の独自性が主張できると考えている。

## 6. まとめ

本稿では、江戸語から現代東京語を対象に、敬語形式「オイデ」の意味用法の変化に注目した。そこから、かつて移動と存在そして継続を表した「オイデ」には求心的な移動〈来る〉、存在〈いる〉、継続〈ている〉の意味は残るものの、非求心的な移動〈行く〉の意味は早くに見られなくなることを示した(§4)。そして、同様の変化が「イラッシャル」、そして先行研究の意味記述から「オジャル」「オリヤル」にも生じていることを指摘した(§5)。このような変化が生じたのは、求心的な移動の意味で繰り返し使われ、その意味が語に焼きついたことが主な要因であると述べた。求心的な移動として繰り返し使われる理由の一つに、この移動が主に話し手自身が位置する場所への動作主の移動であることから、尊敬語を用いて待遇する意識が働くことが考えられると考察した(§5)。

日本語の(敬語の)歴史において、「オイデ」や複数の敬語動詞に生じている共通の変化は、近世以降の受給表現補助動詞「～てやる」「～てもらう」「～てくれる」とその敬語形「～て(差し)上げる」「～て頂く」「～て下さる」の発達と同様の流れにあると考える。宮地(1975)によれば、受給表現補助動詞の発達は「事態の認識における話し手の関与」を表すようになったということであり、「近代日本語らしさを表す事実」と述べている。本稿で述べてきた「オイデ」や敬語動詞の変化は、話し手の関与する方向が繰り返し表されるようになった結果生じた変化である。ここから、両者は日本語の敬語が話し手中心の表現へと変化していく中に位置づけられると考えられるのである。

### 【注】

- 1) 「オイデ」は「オイデだ」「オイデ下さい」「オイデのお客」「こっちへオイデ」のようにしてそれぞれ名詞的なふるまい、述語的なふるまいを見せるが、すべて「オイデ」として一括して表す。それぞれのふるまいを個別に指す際は、「命令用法の「オイデ」」のように言及する。
- 2) 形式は「 $\square$ 」、意味は〈 $\square$ 〉を用いて表すこととする。
- 3) 本稿において「敬語動詞」とは、「イラッシャル」「オイデニナル」「オイデナサル」「オリヤル」「オジャル」のような動詞のふるまいを見せ、移動と存在を表す(表した)形式とする。後に示すの表1



表2では煩雑さを避けるため、便宜上「オイデ」も「敬語動詞」としている。

- 4) 三上(1970)によれば、求心的な動詞として「来る」「くれる」、非求心的な動詞として「行く」「やる」を挙げている。そして「求心的というのは、話手の立っている地点(ココ)へ向かって、または話手の指定する地点(ココ)へ向かっての移動である。それ以外の方向が非求心的である。」と述べている。なお、本稿では尊敬語形式について論じるため、常に話し手以外の人物(二人称、三人称)が動作主体となる移動を取り上げる。
- 5) 図1 図2の「●」「▲」はその作品内で対象形式が一例でも見られたことを表している。図3の「■」も同様である。
- 6) 対象としたのは水谷(2005)「資料」に示した「武田泰淳」以降の作品である。詳細はこちらを参照されたい。
- 7) 話題等の問題もあるので一概に扱えないが、参考情報として用例数に注目したい。単純に表2の〈行く〉と〈来る〉の用例数を比較すると、すべての形式において〈来る〉の用例数が〈行く〉を上回っていることがわかる。「オイデ」においては、〈来る〉は〈行く〉の2.倍強の用例数がある。このように〈行く〉よりも〈来る〉の方が、頻繁に使われることによつて、意味が焼きつくようになったと言える。
- 8) 〈来る〉を表す「オイデ」の用例を見たところ、9割強の例が話し手もしくは話し手の家を目的地とする動作主の移動であった。
- 9) 他の要因として、「オ+連用形+(ダ)」は「オイキ」「オイキダ」となることは可能だが、〈来る〉〈居る〉はこの形式が作りにくい。そのために、これらの意味で「オイデ」が用いられることも考えられる。しかしそうなると、「オ+連用形+(ダ)」がよく見られる江戸期に〈行く〉〈行け〉の「オイデ(ダ)」があり、「オ+連用形」がさかんではない大正期に入ってから〈行け〉の意味の「オイデ」が見られなくなる理由がはっきりしない。そのため、この点が変化の主な要因とは考えにくい。いずれにしても、現時点ではこの点を確認するデータを持ち合わせていないので、今後の課題としたい。
- 10) 「『現代敬語』は現代共通語文でのそれであり、『古代敬語』というには代表として『源氏物語』『枕草子』など、中古仮名文でのそれを想定している。」と述べている。
- 11) 宮地(1975、1981)によれば「～て下さる」は「ロドリゲス文典のほか狂言(虎明本)に頻出する」とあり、「～て頂く」は19世紀の中頃に現れるようであると指摘がある。
- 12) 用例が見られた作品は『怪談牡丹灯籠』『社会百面相』『暗夜行路』に1例ずつ、「或る女」に3例である。
- 13) 「～て下さる」「～て頂く」が一般化する時期と「オイデ」の変化時期を考慮する必要はある。

## 【引用文献】

- 久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
- 小松寿雄（1971）「近代の敬語Ⅱ」辻村敏樹編『講座国語史 第5巻 敬語史』大修館書店
- 佐久間鼎（1943）『日本語の言語理論的研究』三省堂
- J. ロドリゲス著 土井忠生訳（1955）『日本大文典』三省堂
- 田中章夫（1957）「近代東京語命令表現の通時的考察」『国語と国文学』5月号 東京大学国語国文学会
- 田中章夫（2002）『近代日本語の語彙と文法』東京堂出版
- 土井忠生・森田武・長南実編訳（日本イエズス会著）（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 外山映次（1977）「敬語の変遷(2)」『岩波講座 日本語 4 敬語』岩波書店
- 三上章（1970）『文法小論集』くろしお出版
- 水谷美保（2004）「「イラッシャル」「イラッシャイ」の意味領域の縮小」『日本語学会2004年度秋季大会予稿集』
- 水谷美保（2005）「「イラッシャル」に生じている意味領域の縮小」『日本語の研究』第1巻4号 日本語学会
- 宮地裕（1975）「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」『鈴木知太郎博士古希記念 国文論攷』桜楓社
- 宮地裕（1981）「敬語史論」『講座日本語学 9 敬語史』明治書院
- 山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院
- 山西正子（1972）「「いらっしゃる」考」『国語学』第88集 国語学会
- 湯澤幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院

## 〔資料〕

- 使用テキスト（作品名に引いた下線は図1、図2で示した「作品名」を表す）
- 田舎老人多田爺（丹波屋利兵衛）「遊子方言」中野三敏ほか校注（1971）『日本古典文学全集 洒落本 滑稽本 人情本』小学館／夢中散人寝言先生「辰巳之團」水野稔校注（1958）『日本古典文学大系59 黄表紙 洒落本集』岩波書店／紀南子「駅舎三友」『洒落本大成』第9巻 中央公論社／鐘木庵主人「卯地臭意」水野稔校注（1958）『日本古典文学大系59 黄表紙 洒落本集』岩波書店／山東京伝「通言総籬」水野稔校注（1958）『日本古典文学大系59 黄表紙 洒落本集』岩波書店／山東京伝「傾城買四十八手」水野稔校注（1958）『日本古典文学大系59 黄表紙 洒落本集』岩波書店／山東京伝「錦之裏」水野稔校注（1958）

『日本古典文学大系59 黄表紙 洒落本集』岩波書店／梅暮里谷峨「傾城買二筋道」水野稔校注（1958）『日本古典文学大系59 黄表紙 洒落本集』岩波書店／式亭三馬「浮世風呂」中村通夫校注（1957）『日本古典文学大系63 浮世風呂』岩波書店／振鷺亭主人「叶福助略縁起」岡雅彦校訂（1990）『叢書江戸文庫19 滑稽本集〔一〕』国書刊行会／十返舎一九「清談峰初花」武藤元昭校訂（1995）『叢書江戸文庫36 人情本集』国書刊行会／為永春水「春色梅兒誉美」野中次郎代表（1928）『近代日本文学大系』第十二巻 国民図書／三亭春馬「風俗吾妻男」武藤元昭校訂（1995）『叢書江戸文庫36 人情本集』国書刊行会（三亭春馬が執筆している二編までを対象とした。三篇以降の執筆は為永春水による）／寛江舎篤丸・十字亭三九作 村上静人代表（1919）『深契情話 恋の若竹』第八回 人情本刊行会／曲山人「娘消息」三浦理編『娘節用・教草女房気質』有朋堂書店（曲山人が執筆している二編までを対象とした。三篇以降の執筆は為永春水による）／松亭金水「閑情未摘花」野中次郎代表（1926）『近代文学大系』第二十一巻 国民図書／梅亭金鷲「妙竹林話七偏人」『近代文学大系』第二十二巻 国民図書／山々亭有人作 村上静人代表（1916）『春色江戸紫』第十八回 人情本刊行会／松村春輔「春雨文庫」（1966）『明治文学全集1 明治開化期文学全集（一）』筑摩書房／三遊亭円朝「怪談牡丹灯籠」（1965）『明治文学全集10 三遊亭円朝集』筑摩書房／坪内逍遥『当世書生氣質』（2006）岩波文庫 岩波書店／竹柴其水「神明恵和合取組」（1929）『日本戯曲全集 第三十二巻 河竹新七及竹芝其水集』春陽堂／尾崎紅葉（2003）『多情多恨』岩波書店／内田魯庵（1954）『社会百面相』岩波書店／二葉亭四迷（1987）『其面影』岩波書店／夏目漱石（1951）『三四郎』角川書店／有島武郎（1995）『或る女』新潮社／広津和郎（1951）『神経病時代・若き日』岩波書店／志賀直哉（1990）『暗夜行路』新潮社／武者小路実篤（1947）『友情』新潮社／中勘助（1984）『菩提樹の樹』岩波書店／谷崎潤一郎（1947）『痴人の愛』新潮社／長与善郎（1941）『竹沢先生というひと』岩波書店／宮本百合子（1954）『伸子（下）』／長谷川時雨（1983）『旧聞日本橋』岩波書店／永井荷風（1987）『つゆのあとさき』岩波書店／堀辰雄（1948）『菜穂子・楡の家』新潮社／幸田文（1957）『流れる』新潮社／大岡昇平（1978）『事件』講談社／円地文子（1982）『人形姉妹』集英社 ※ 二葉亭四迷以降の作品の年数は文庫初版発行年を示している。